

御手洗七卿落遺跡

竹原邸は、幕末の江戸時代末期に起きた事件にちなんで「七卿落」と呼ばれている。幕府の支持者から政治亡命を求めて長州藩（現山口県）に逃れてきた朝廷の7人の公家にちなんで名付けられた。この屋敷は、19世紀に御手洗町の庄屋として活躍した有力商人の多田家のものであった。

この時代の政治的混乱は、1853年にアメリカ海軍提督のマシュー・ペリー（1794-1858）が江戸湾に来たことに端を発している。アメリカ政府はペリーを派遣して日本の港を強制的にアメリカ貿易に開放させようとしていたが、その要求は、紛れもなく優位に立つアメリカ海軍の明確な脅威に裏付けられていた。ペリー来航に対する反応は、日本政府の様々な派閥の間で異なっており、ある者は開国を支持したが、ある者は戦争の危険を冒すことを支持した。将軍は事実上の日本の支配者であったが、多くの大名は、代わりに孝明天皇（1831-1866）を支持した。幕府は、アメリカと戦争をすれば反乱が起きると考え、日本海軍を整備しながらペリーをはじめとするアメリカの特使と外交交渉を行うことにした。この交渉の結果、1858年7月29日には修好通商条約が調印され、鎖国政策は事実上終了し、幕府は忠誠心をもって分裂した。

この政策転換により政治エリートは、朝廷と幕府の統合を求める「朝廷と幕府の統合」派と、幕府の廃止、天皇の復権、必要ならば戦争による鎖国の保護を求める「尊王攘夷」派に分裂した。このような分断された政府を背景に、「七卿落」に至るまでの出来事が展開された。

1863年9月30日、公武合体派は京都の朝廷から7人の公卿を追放した。七人は三条実富（1837-1891）を中心に、天皇に忠誠を誓っていた尊王攘夷派の急進的な小集団を構成していた。これらの貴族たちは、長州藩の大名の保護を求めて京都の宮廷を逃れた。逃亡中、7人のうち5人は御手洗を通過し、竹原邸に2泊した後、長州への旅を続けた。最終的に幕府は倒され、天皇は権力を回復した。

数年後、竹原家が屋敷を明け渡した後、再び政治的な陰謀の場となったと記録されている。ここにはティーレマンというオランダ人が住んでいて、薩摩藩との武器の密貿易を組織していた。